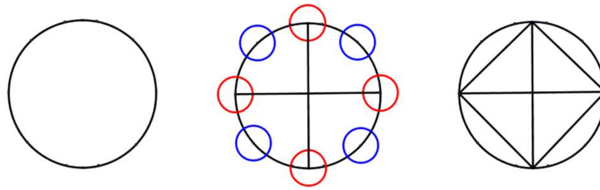
神名辞典

（カタカムナ文献）

２０２２年4月2日

青天





目次

前書

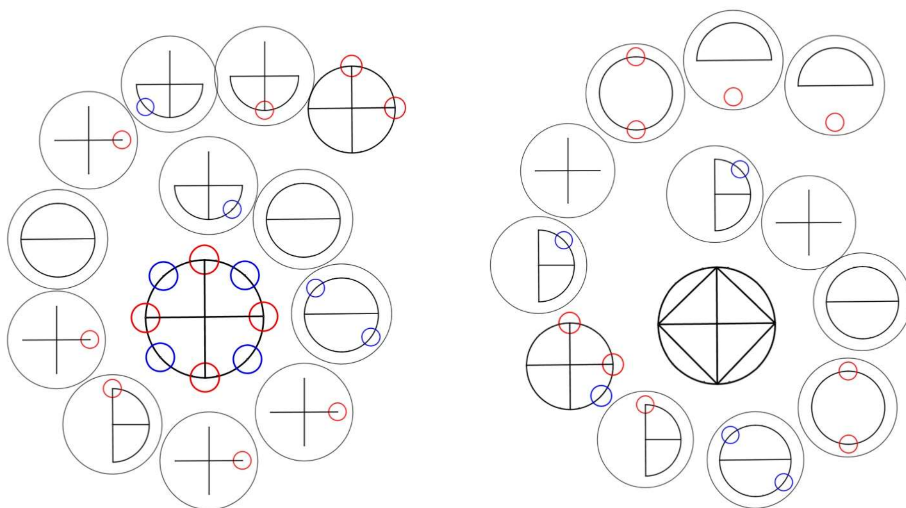
堀秀成（国学者）の著書『神名考』を参照しながら、原典文献（８０首）に登場する古事記神話の神名に関するセンテンスをまとめた辞典を作成した。神名とは、カタカムナ文献由来の「潜象物理の内容」に関する記述の音列だった。

シリアル番号（原典文献のウタ番）：原典文献のセンテンス（『神名考』に登場する神名＝漢字）・原典文献における物理的内容・意味の順でまとめた。

最初の１０項目は、『神名考』にはなく（カミ・ミコトは例外）、原典文献１～４首の代表的音列をピックアップした。５・６首の４８声音符は、ここでは扱わない。７首から『神名考』の造化三神が開示される。シリアル番号では、１１番から。古事記神話に登場する島名なども、原典文献由来と思われるものはピックアップした。

神名の物理的な意味を理解することで、文献物理の探求を深めていただきたい。個人研究者用資料としてご活用ください。

神の名に物理あらわす物語



神名辞典

１（１）：カタカムナ

カタはカムの転写（反転）。
現象の元型は、潜象の元型に由来する。（カムの代行がカタ）
力場（カ）と電磁場（タ）の統合によって生命場（カムナ）が成立する。

２（１）：ヒヒキマノスヘシ

ヒ（カの相転移）を引き出したマ（時空）の変遷循環によって現象化する。

３（１）：アシアトウアン

あらゆる現象（アシ）は直交原理（アトウ）によって生じる（アン）。

４（２）：ヤタノカカミ

中心図象の名。８段階で飽和安定する現象・潜象循環モデル。具現原理。

５（２）：カミ（古事記では神）・・・最初の図象符表記 a13

カがミとなって現象と潜象の境界（界面）に現れる。源流。上。

６（３）：フトタマ

統合と分割によるマ（時空）の発生。フト＝２つのものの対向。２つのものとしてのカム・アマ、力場・電磁場、精子・卵子などから生命場を現出（タマ）する。

７（３）：ミコト（古事記では尊・命）・・・２番目の図象符表記 a138

ミで循環する。潜象内循環。見えない循環の存在。

８（３）：フトマニ

中心図象の名。統合してマ（時空）に定着（ニ）する。対向発生の基本原理で、カム・アマや力場・電磁場のような２つの直交（もしくは反転）した物理量の関係性から生命場のような現象場を生み出す創造原理。

９（４）：イハ

電気事象が展開される場。我々の位置。観測可能な領域。現象場。

１０（４）：ヨソヤコト

４８。３首のミコト（潜象内循環）に対し、現象を含む大循環。

１１（７）：アマノミナカヌシ（天御中主・あめのみなかぬし）

現象の元型でイマ（現象）とカム（潜象２）の中間に位置する。潜象１。

１２（７）：タカミムスヒ（高御産巣日・たかみむすび）

現象（イマ）方向への連結を示す。（アマ＝潜象１を起点にして）

１３（７）：カムミムスヒ（神御産巣日・かみむすび）

カム（潜象２）方向への連結を示す。（アマ＝潜象１を起点にして）
イマ・アマ・カムという三層構造が、この世界の基本構造（二重潜象）。

１４（８）：ウマシタカカムアシカヒヒコ（宇麻志阿斯訶備比古遅・うましあしかびひこぢ）

マ（時空）が発生し、タカカム構造（タカミ・カムミ）によってあらゆる現象は、カガヒ（単位元）となって循環を繰り返して生じる。

１５（８）：トコロチマタノ（道俣・ちまたの・・・９９番）

カム（ロ）の持続・循環で、アマが発生・変遷すると空間量を生み出す。

１６（８）：トキオカシ（時置師・ときおかし・・・９７番）

トキ（時間量）は、カ（ム）の立体化によって誕生する。
トコロチマタノ・・空間量の広がり性（膨張性）・・ソコ的
トキオカシ・・時間量の収斂性（収縮性）・・ソキ的
トキとトコロは、相補的（直交性）な関係にある。

１７（９）：アメノトコタチ（天之常立・あめのとこたち）

潜象での変遷と互換重合性。
トコタチ・・事象は常に階層間を構造的に統合する仕組みで成立する。

１８（９）：クニトコタチ（国之常立・くにのとこたち）

現象での互換重合性。

１９（９）：アメクニカソコソキタチ（該当なし）

潜象・現象における力の膨張性と収縮性。

２０（9）：マノトキトコロトコタチ（該当なし）

マ（時空）の変遷による時間量・空間量の互換重合性。

２１（１０）：オノコロシマカムナホク（該当なし）

環境にシマ（マの示し）を発生させる。そこにカムナが潜んでいる。
オノコロシマ：物質のような立体性を持つシマ。

２２（１０）：アメツチネハシマリ（古事記開闢の文言）

潜象から現象に持続的に現れるために、カム（ネ）の影響を受けながら、
空間場（ハシ）にアマから分離したマリが発生。これが、始まりの語源。

２３（１１）：イハフトヤネイキツチノワ（該当なし）

電気事象の場を成立させているのは、潜象のフ・ヤ・ネにある。
電気エネルギーと物質の変遷・循環が生命現象の本質。

２４（１２）：カタカムナノミソテホト（該当なし）

カタを利用してカムナの変遷によって、潜象から現象へ発現させる。

２５（１２）：トヨクスヘ（クスヘ→クモヌ・豊雲野・とよくもぬ）

双対性（階層をまたぐ直交循環・双対循環＝４相性）の示し。

２６（１３）：スヒチニツヌクヒイモイククヒ（宇比地・うひぢ　妹須比智・
　　　　　　　　　　　いもすびぢ　角杙・つぬぐひ　妹活杙・いもいくぐ
ひ）

吸着事象には波動性が関与している。個々の見えない自由度を持った単位（潜象）は、電気傾斜による融通性で別の単位（現象）とつながる。

イモ・・・連結（接続）子。異なった事象を取り持つ汎用の型。
（例：常温常圧プラズマ・・電気事象としてつなぐ）

２７（１３）：オホトノチイモオホトノヘ（意富斗能地・おほとのぢ　妹大斗乃辨・いもおほとのべ）

広域環境から持続的な量を受け取る機構（構造）によって、広域環境に従属（従う）する働きが生じている。

２８（１３）：オモタルイモアヤカシコネ（游母陀琉・おもだる　妹阿夜訶志古泥・いもあやかしこね）

重力なるものは、階層をまたぎながら循環する根のような機構（構造）によって生じている。立体性を発揮する力が関与。

２９（１３）：イサナミイサナキ（伊邪那美・いざなみ　伊邪那岐・いざな
ぎ）

電気事象の差には、波動性（潜む・動）と粒子性（現る・静）を伴う。

３０（１４）：オホコトオシヲ（大事忍男・おほことおしを）

広域環境の事象（巨視的）には、立体性と４相性が現れる。

３１（１４）：イハツチヒコイハスヒメ（石土毘古・いはつちびこ　石巣比賣・
いはすびめ）

電気事象の場は、４相性を持つ持続的な量の供給によって、単位形成を促す。循環（ヒコ）と内包（ヒメ）がセットになっている。

イハス・・電気事象の場の進行限界は、光の速度で決まる。

３２（１４）：オホトヒワケ（大戸日別・おほとひわけ）

広域環境と単位（個・該当段階・系）となる構成要素に分けられる。

３３（１４）：アメノフキヲ（天之吹男・あめのふきを）

微視的な変遷は、２つの時が関与して、４相性を発現する。

３４（１４）：オホヤヒコ（大屋毘古・おほやびこ）

広域環境（巨視的）は、大循環している。

３５（１４）：カサケツワケノオシヲ（風木津別之忍男・かざけつわけのおしを）

微視的な量は、離散的に分けられ、立体性と４相性を発現する。

３６（１４）：オホワタツミ（大綿津見・おほわたつみ）

広域環境全体のポテンシャルは、積まれてゆく。

３７（１４）：ハヤアキツヒコイモハヤアキツヒメ（速秋津日子・はやあきつひこ　妹速秋津比賣・いもはやあきつひめ）

個々の事象は、それぞれの場の限界と時を持って循環（単位形成）する。
その性質自体を内包して次の循環を促す。これが連動（随伴）している。

オホとハヤ（イハス・ハコ）・・図象符では、鏡映関係にある。

３８（１５）：アワナキアワナミツラナキナミ（沫那藝・あわなぎ　沫那美・あわなみ　頬那藝・つらなぎ　頬那美・つらなみ）

潜象における２状態（アワナキ・アワナミ）から現象が生み出される。
それがツラナキナミ。ナキ・ナミという物性は継承され連なってゆく。
力場をアワで抽象すると、電磁場は、さしずめツラとなる型（カタ）。

３９（１５）：アメノミクマリクニノミクマリ（天之水分・あめのみくまり　国之水分・くにのみくまり）

現象事象未満の変遷状態（アメノ）におけるミクマリ（３つの自由度を持つマリ＝流動性を主体とした時空生成物）は、現象事象が確定した変遷状態（クニノ）までその物性（ミクマリ）を継承してゆく。ミクマリは、「ワ」の代行性の型を示す。・・・三種混在の型を暗喩。

４０（１５）：アメノクヒサモチクニノクヒサモチ（天之久比奢母智・あめのくひざもち　国之久比奢母智・くにのくひざもち）

現象事象未満の変遷状態（アメノ）におけるクヒサモチ（基点を持ち定められた制限内である程度の自由度を発揮する型）は、現象事象が確定

した変遷状態（クニノ）までその物性（クヒサモチ）を継承してゆく。

４１（１５）：シナツヒコククノチ（志那都比古・しなつひこ
久々能智・くくのち）

規則的な配置構造（結晶系・シナツヒコ）は、その自由度（ミクマリ・クヒサモチ）の変遷持続（ククノチ）によって成立している。

４２（１５）：オホヤマツミヌツチカヤヌヒメ（大山津見・おほやまつみ
鹿屋童比賣・かやぬひめ）

広域環境（オホ）との接点を有する機能（ヤマ）が働き、物質性・立体性（ツミ）が生じると共に、その結晶構造（シナツヒコ）も外域（広域環境）に還元される構造を秘めている。「ワ」に回帰してゆく全体循環性が基本。

４３（１６）：アメノサツチクニノサツチ（天之狭土・あめのさづち
国之狭土・くにのさづち）

流動性の過渡（アメノ）において局在・粒子的事象（サツチ）あり。
定着性の過渡（クニノ）においても局在・粒子的事象（サツチ）あり。

４４（１６）：アメノサキリクニノサキリ（天之狭霧・あめのさぎり
国之狭霧・くにのさぎり）

流動性の過渡（アメノ）において非局在・波動的事象（サキリ）あり。
定着性の過渡（クニノ）においても非局在・波動的事象（サキリ）あり。

４３・４４は、アメ・クニの両プロセスにおいて、局在的な状態（粒子性）と非局在的な状態（波動性）が存在することを示唆する。ボーズ・アインシュタイン凝縮のような物理現象（超伝導・超流動・超電導やレーザー原理など）と相似な事象である。相互変換性・交番性を示唆。アメノとは、量子論的なミクロ領域（微視的）のプロセスと相似。クニノ

とは、古典論的なマクロ領域（巨視的）のプロセスと相似。
４５（１６）：アメノクラトクニノクラト（天之闇戸・あめのくらと
国之闇戸・くにのくらと）

流動性の過渡（アメノ）において直交関係性（クラト）がある。
定着性の過渡（クニノ）においても直交関係性（クラト）がある。

クラには、蔵・暗以外に２つのものを比べる意味がある。トには、統合の意味と同時に直交の意味も重なる。単位・段階をまたぐ連続性（螺旋的階層構造）が、自然界の本質である。

４６（１６）：オホトマトヒコオホトマトヒメ（大戸惑子・おほとまどひこ
大戸惑女・おほとまどひめ）

広域的な親和性（オホト）とそれぞれの間における全域性（マト）には、
単位・段階を超えて連続する性質（ヒコ）がある。さらに、その両者は双方向性（相互変換性・交番性）を秘め（ヒメ）ている。

全体と部分の考え方・捉え方の基本原理を示唆。

４７（１６）：トリノイハクスフネ（鳥之石楠船・とりのいはくすふね
またの名を天鳥船・あめのとりふね）

統合・分離・変遷（トリノ）という直交性・変換性を通して、電気事象の場（イハ）は成立し、融通性・ペア性（ク）と飽和性・オクテッド性・進行性（ス）の２つの根源的な性質（フネ）に起因する。

４８（１６）：オホケツヒメ（大宣都比賣・おほげつひめ）

広域環境への親和性・構造性（オホ）と個別への変化・分解性（ケツ）は、双方向性を秘め（ヒメ）ている。２つの状態を行き来する過渡の状

態が必ず存在する。流動性としてのアメノ図象とヒメ図象が同じ図象であることに着目せよ。大循環（オホケツ）の内在性（ヒメ）を認識せよ。

４９（１７）：マカハコクニノヒトツカタツミ（該当なし）

マカの重なりによって場が循環し定着変遷して単位形成してゆく。
相似の型の積み重ねによって、現象化（物質化）する原理を示す。
マ（電磁場を抽象）カ（力場を抽象）による基本単位の生成原理。

５０（１９）：アメノウツメ（天宇受賣命・あめのうづめのみこと・・『神名考』では、アマテラスのさらに後から登場・・１２１→１２２）

潜象における渦の兆し。現象化への必須プロセス。

５１（２１）：イモマクカラミヌフトヤマト（該当なし）

電場（イモ）・磁場（マク）・力場（カラ）の３つの要素が
互いに重合して極限飽和安定したマ（電磁場）・ト（力場）。
電磁場は観測しやすいが、力場は観測しづらい。

５２（２２）：モコロシマ（該当なし）

潜象におけるモヤモヤした循環による転がり性を示すマ。
アメオキミツコ　モコロシマ。

５３（２２）：ツクシシマ（該当なし）

現象における局在性を示すマ。
アマツアキツネ　ツクシシマ。

５４（２２）：オホトヤシマ（該当なし）

広域環境に重合した極限飽和安定を示すマ。
（５２）と（５３）が重なって全体性を担保している。

５５（２３）：アマタカマカハラアワチホノサワケ（該当なし）

始元から発生・分化・変遷・還元する場の循環性を表す。
アワの持続親和変遷によって差分が全体から分けられる。
アワは虚実を含む。アハは実部のみ。アワチ<>アハチ。

５６（２３）：オキミツコシマ（該当なし）

立体性を持って発生する３つの循環するシマ。
潜象にも、現象にも、このようなシマがある。

５７（２４）：ソコソキシマ（該当なし）

拡散・収縮性を持つ局在したシマ。

５８（２５）：ミツコナミ（該当なし）

３つの循環するナミ。電磁力場の統合による波動性。

５９（２５）：ヒノカカヒコ（火之炫毘古・ひのかがびこ）

潜象側の変遷における力学的な作用の反復による単位形成とその循環。
光現象に関するレーザー原理を暗喩。励起・誘導・連鎖・循環による。
潜象の力に対してある種の反復動作を繰り返すことで現象させる手法。

６０（２６）：アメノハニヤスミツハノメ（彌都波能賣・みづはのめ・・
『神名考』ではカナヤマヒコヒメの後に登場・・８１番）

潜象・流動性の場が定着的に反応すると３つの場（電磁力場）に変化して現象方向への芽（兆し）ができる。

６１（２６）：オキツフトマリ（該当なし）

立体性を持って局在化・増幅成長するマリ。

６２（２７）：イハクスユマリ（該当なし）

電気事象の場は潜象における反応が進行してマリが涌現する。

６３（２７）：ワクムスヒ（・・８２番）

枠を結ぶ。電磁場が形成される。物質化への道程。

６４（２８）：カクナツチ（・・８０番）

核となって局在し持続する。中心核が誕生する様子を暗喩。

６５（２８）：イハツツヌヲ（・・８４番）

電気事象の場には潜象の双対性や過渡を秘めたポテンシャルがある。
円筒形やコイル形状から、電磁場の働きを誘導できる可能性を暗喩。

６６（２９）：ミカヒシキシマハヤヒタケフツ（・・８５・８６番）

３段階の潜象作用から現象化を起こす場が形成され変化増殖する。

６７（２９）：オホワクムスヒヤタシマ（該当なし）

広域環境全体に疎通して８段階で飽和するポテンシャル場のシマ。

６８（３０）：トヨクモヌ（・・２５番）

潜象における双対性（階層をまたぐ直交循環・双対循環）を暗喩。

６９（３０）：ウヒチニホロシ（・・２６番）

　　　現象事象には波動性が関与し潜象・現象に親和した背景勢力が存在する。

７０（３１）：マクミワクタマイモカラミマクミトノヘシ（該当なし）

　　　磁場の発現には電場と力場が関与し磁場はそれぞれと直交関係にある。

７１（３１）：サカキメクリノカムヤタマリ（該当なし）

　　　潜象におけるポテンシャルの差で回転が起きカムが相転移してマリ発生。

７２（３２）：シマイヨノイヤシロチ（該当なし）

　　　現象事象には逆・順の２種類の循環がある。代謝循環持続がイヤシロチ。
　　　イヨノでヤに向かう方向（逆行）とイヤで直接ヤに向かう方向（順行）。

７３（３２）：クナキノタマワケ（該当なし）

　　　自由なナキの変遷（クニノ）によって物質化の前段階へと全体から分離。

７４（３３）：エヒメサヌキチアワトサチ（該当なし）

　　　虚軸に潜象の差分量が持続し時空全体（電磁場）に力場の差分量が持続。

７５（３４）：トワチカフタヤヒメ（該当なし）

マクロ（力場＋電磁場）とミクロ（力場系）の２つの潜象作用が内在。

７６（３５）：マノヒコヒメ（・・３０〜３７番）

マ（時空・電磁場）の変遷には単位循環と次の単位を内包している。

７７（３６）：ツラナキメクルトヨツラナミ（・・３８番）

ツラナキの回転によって４相（双対構造）のツラナミが生じる。
ツラは表層を暗喩。

７８（３７）：イヤミソキ（・・４０〜４２番）

電気事象の限界において磁気事象へ転換する作用。電磁場の直交性。
該当単位・系を維持したまま、直交関係にある別の単位・系と接続。

７９（３８）：ヒノヤキハヤヲヒメ（火之夜藝速男比賣・ひのやぎはやをひめ）

潜象側の変遷における安定した双対性を持つポテンシャル場の存在性。

８０（３９）：ヒノカクツチ（火之加具土・ひのかぐつち）

潜象側の変遷における核となって局在し持続する性質。

８１（３９）：カナヤマヒコカナヤマヒメ（金山毘古・かなやまびこ
金山毘賣・かなやまひめ）

潜象側から見たマ（電磁場的）の螺旋循環（単位形成）とその可能性。

８２（３９）：ミツハワクムスイヤミソキ（和久産巣日・わくむすび）

３つの場が形成され進行発展し電気事象の極限から磁気事象へ転換。

８３（４０）：トヨウケヒメヌ（豊宇気毘賣・とようけひめ）

双対構造（４相性）を受け継ぎ（発生・変化）ながら潜象に内在する。

８４（４０）：イハサクネサクイハツツヲ（石拆・いはさく　根拆・ねさく
石筒之男・いはつつのを）

電気事象の場の発現は潜象の根・源の発現に由来し双対同軸構造となる。

８５（４０）：ミカヒハヤヒヌ（甕速日・みかはやび　樋速日・ひはやび）

３段階の潜象過程から新たな場が形成されてゆく。

８６（４０）：タケイカツチタケフツノムスヒ（建御雷之男・たけみかづちのを　建布都・たけふつ・・６６番）

ポテンシャル場の変化によって電気事象が継続する。
ポテンシャル場の変化によって増殖し局在化する現象が起きる。
４方向（電磁気）は２方向（電気・磁気それぞれ）の結び・直交接続。

８７（４１）：トヨクラオカミクラミツハ（闇淤加美・くらおかみ
闇御津羽・くらみつは）

双対性を内在した立体構造を生み出す源には３つの場が内包されている。

８８（４１）：マサカヤマツミ（正鹿山津見・まさかやまつみ）

マ（時空・電磁場）の差分量（カが関与した）が山のように積まれる。

８９（４１）：オトヤマツミヲ（淤縢山津見・おどやまつみ）

立体性を持った力場（トが背景）によるテトラ骨格の山が積まれる。
ツミヲに双対構造を持った蓄積と設定しプラトン立体の正８面体を連

想。

W ピラミッドのような構造を暗喩。

９０（４２）：クラヤマツミヲ（闇山津見・くらやまつみ）

潜象側でテトラ骨格を持って山のように積まれる。

９１（４２）：オクヤマツミ（奥山津見・おくやまつみ）

潜象側で立体性を持った山のように積まれる。

９２（４２）：ココロツラナキハヤマツミ（羽山津見・はやまつみ　『神名考』
では、原山津見・はらやまつみ　戸山津見・とやまつみ　も登場）

潜象側の微粒子的な量が表層（現象方向）に現れ場を形成してゆく。

９３（４２）：アメノヲハハリイツノヲハハリ（・・『神名考』の P93（最後に近い）あたりに伊豆之尾羽張・いづのをばはり　として登場）

潜象側の双対性が現象側（電気性・個々性）の双対性として場へ配当。

９４（４３）：ヨモツチシキノイフヤサカ（該当なし）

不確定事象から確定事象へ変遷する電気事象には２つの傾斜が関与。

９５（４３）：ツキタテフナト（衝立船戸・つきたつふなと）

確定事象にはポテンシャル場の変動が関与しそのポテンシャル場の中和（現象化の前段階）は２つのナ（アマナ・カムナ）が重合して起きる。

９６（４３）：ミチナカチハ（道之長乳歯・みちのながちは）

現象方向への道筋。アナ（現象側から見た）の持続によって場を形成。

９７（４４）：マノハストチノトキオカシ（時置師・ときおかし・・１６番）

時空（電磁場）の変遷と場の進行には力場の持続・変遷が関与している。

力場を内包したポテンシャル場の変動は力の間接関与で立体性を示す。

光現象は、電磁場の振動によって起きる。ある種の回転運動とも言える。

それに比べ、力場は基本直線運動で振動を伴わないので光速より早い。

現行の科学（物理学）には、このような力場伝達の概念が欠落している。

万有引力は真実ではなく、渦場中心への向心力が重力の本質、が正しい。

９８（４４）：ワツラヒノウシ（和豆良比能宇斯・わづらひのうし）

非局在・局在の両方の性質が現れ単位形成と変遷によって現象化する。

９９（４４）：チマタムスヒヌヒ（道俣・ちまたの・・１５番）

持続的にマ（電磁場）が発生して立体性を発現し進行循環（潜象）する。

１００（４４）：アキクヒノウシ（飽咋之宇斯・あきぐひのうし）

ポテンシャル場の変動飽和による単位形成と変遷によって現象化する。

１０１（４４）：オキサカル（奥疎・おきさかる）

立体性（生命質の進行過渡）を伴う差分（傾斜）の発生。反応促進。

１０２（４４）：オキナキサヒコ（奥津那藝佐毘古・おきつなぎさびこ）

立体性を伴う種々の粒子的存在が循環する。立体配列の形成を暗喩。

１０３（４５）：オキツカヒヘラ（奥津甲斐弁羅・おきつかひべら）

立体性を伴う事象はカ→ヒ相転移して平面配列から始まる。

１０４（４５）：ヘサカルミチ（辺疎・へさかる）

平面方向に配列する順路・経路。おとなしく整然とした並びを暗喩。

１０５（４５）：ヘツナキサヒコ（辺津那藝佐毘古・へつなぎさびこ）

平面性を伴う事象にも種々の粒子的存在が循環する。平面配列を暗喩。

１０６（４５）：ヘツカヒヘラ（辺津甲斐弁羅・へつかひべら）

平面性を伴う事象はカ→ヒ相転移して平面配列する。

１０７（４５）：アワノマカヤソマカツヒ（八十禍津日・やそまがつひ）

時空全体（電磁場の総称）の変遷は電磁場と力場の相互作用で起きる。
電磁場と力場の合成から、新たな単位（虚実をペアとした）が生じる。

１０８（４５）：オホマカツヒ（大禍津日・おほまがつひ）

広域環境においても電磁場と力場の合成から新たな単位形成が起きる。

１０９（４６）：アヤカムナホヒ（神直毘・かむなほび）

潜象内循環するカムが還元・定着・親和して新たな単位を形成する。

１１０（４６）：オホカムナホヒ（大直毘・おほなほび）

広域環境にあるカムが還元・定着・親和して新たな単位を形成する。

１１１（４６）：イツノメニオホトチムスヒイツノメノ（伊豆能賣・いつのめ）

広域環境との相互作用によって電気事象の芽（兆し）が発展定着する。

１１２（４６）：ソコツワタツミ（底津綿津見・そこつわたつみ）

底通性のある全体量が積まれている。広域のエネルギー全量を暗喩。

１１３（４６）：ソコツツヲ（底筒之男・そこつつのを）

底通（カム）領域には双対構造（同軸や二重螺旋）の筒形状あり。
円筒・コイル形状等には、電磁力場の共通の幾何学的な型がある。
ツツは二重渦（螺旋渦）や津々浦々に通じる力場発現原理を暗喩。

１１４（４６）：ナカツツヲ（中筒之男・なかつつのを・・『神名考』には、
中津綿津見・なかつわたつみ　も登場）

中間・中層・境界領域（アマ・カム共通）にも双対構造の筒形状あり。

１１５（４７）：ウハツワタツミ（上津綿津見・うはつわたつみ）

表層・現象場領域（イマ・アマ共通）にも全体量が積まれている。

１１６（４７）：ウハツツヲ（上筒之男・うはつつのを）

表層・現象場領域（イマ・アマ共通）にも双対構造の筒形状あり。

１１７（４７）：アマテラス（天照大御神・あまてらすおほみかみ）

現象の元型であるアマを参照する。アマの方向に現象の元型を観る。
アマは中和（バランス）状態から生成・発生方向へ進む性質がある。

マクロ（宇宙）的には太陽系の中心にある太陽の存在と働きを暗喩。
１１８（４７）：タケハヤスサノヲ（建速須佐之男命・たけはやすさのをみこと）

ポテンシャル場の変化が場の生成発展を促し双対構造で順行変遷する。
ポテンシャル場とは現象事象を前駆する電磁力場の一形態を意味する。
マクロ（宇宙）的には太陽を公転する惑星地球の存在と自転を暗喩。

１１９（４７）：ツキヨミマ（月読命・つくよみのもこと）

全体（ワ・非局在・電磁場）に対して部分（ツ・局在・力場）の
ポテンシャル場の変動（エネルギー・重力的）には順行に対して
逆行するマガ存在。重力（向心力）に対する反力（斥力）の存在。
マクロ（宇宙）的には地球を公転する衛星月の存在と自転停止を暗喩。
月の地球公転軌道は刻々地球から遠ざかる方向に働いている。（斥力）

１２０（４７）：ミクラタナタキリヒメ（多紀理毘賣・たきりびめ）

３つの関係性（イマ・アマ・カムや電場・磁場・力場や月・地球・太陽など）には段階があり、ポテンシャル場の分割を内包している。

太陽系の惑星地球を例に考えると地球は太陽系の渦流（１２階層の内側から５番目の渦流）に乗って太陽重力の影響を受けて公転している。
太陽重力圏は渦流の６・７階層境界まででそこから先は斥力圏となる。
この１２階層構造には重力圏・重力斥力交差圏・斥力圏の３圏がある。
静止衛星や静止惑星はこの重力斥力交差圏範疇の軌道で公転している。

１２１（４７）：イチキシマサヨリヒメ（市杵島比賣・いちきしまひめ
またの名を、狭依毘賣・さよりびめ）

現象側に現れる（電場は磁場の持続で）シマ（イマ・アマ共通）には
必ず差分（歪み性）を含む双対性（構造的ねじれ性）を内包している。

『神名考』は、この後も古事記神話に沿って考察は続くが、原典文献由来と思われる神名は登場しない。途中、天宇受賣命・あめのうづめのみこと（５０番）が登場。さらに続けて、大国主・おほくにぬしが登場。P98 の最終部分では、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命・あまつひだかひこなぎさたけうがやふきあへずのみこと　が登場。ウガヤフキアヘズ王朝を連想する。P99 で『神名考』は終了する。

１２２（７４）：クニヒトアメノハムフナイヤハム（檜崎写本）の部分を、
クニヒトアメオホクニヌシオホ（青天版）として音訳すると、
オホクニヌシ（大国主・おほくにぬし）が現れる。

クニを形成する単位がアメ。（クニヒトアメ）
広域環境にも見えないクニが存在する。（オホクニヌシ）

後書

古事記神話に登場する神名について、カタカムナ文献の物理的な内容を精査・考察して現代版「神名考」を神名辞典として簡潔にまとめた。古事記神話の神名を研究する学生やカタカムナ文献を探求する研究者諸氏へのささやかな資料となれば幸いである。神名に隠された物理をさらに深く探求していただきたい。

清明にカムナ（神名）賀ぐ物理学

十字と大円で幾何抽象されたカタカムナ図象に
力場と電磁場を重ねると
生命場が誕生する

ミクロ（素粒子）からマクロ（宇宙）まで
一貫したフラクタル性（相似象）が働いている

イマ・アマ・カム
電場・磁場・力場
物質・エーテル・アストラル
力場（カム）と磁場（アマ）に本質がある

追記
2024/3/12

INTERNET ARCHIVE に UPLOAD